



しまね文化ファンド
助 成 事 業

女声合唱団フィオーリ
定期演奏会



2022年7月3日(日) 14時開演
大社文化プレイスうら館 だんだんホール

指 揮 石橋 久和 / ピアノ 平林 知子

[ゲスト] 作曲家 信長 貴富

[客 演] 指 揮 雨森 文也 / チェロ 佐藤 翔

【助成】 公益信託しまね文化ファンド・出雲メセナ協会

【後援】 出雲市・出雲市教育委員会・島根県合唱連盟・出雲市合唱連盟・斐川文化協会・JCDI日本合唱指揮者協会

【主催】 女声合唱団フィオーリ

ご挨拶



本日は、女声合唱団フィオーリ定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回はサブタイトルに「石橋久和先生古稀記念」と銘を打ち、私の古稀を大々的に祝っていただきました。そのうえ、作曲家の信長貴富先生、指揮者の雨森文也先生、ピアニストの平林知子先生、チェリストの佐藤翔先生という、超多忙な方々にご来訪いただき、この演奏会に大きな大きな華を添えてくださりました。それだけではなく、信長貴富先生からは、私の古稀祝いとして「こころよ うたえ」女声合唱版を編曲してくださるといふ、最高の贈り物をいただきました。このように皆様から祝福していただける私は、世界の果報者です。ありがとうございます。

さらに「三善3作品を振る!!」という大変大それたサブタイトル。三善先生の作品を演奏させていただくことは、私にとって神の領域に足を踏み入れることと同等であります。振り返ると三善作品は、数々のとても素晴らしい出会いをフィオーリにもたらしてくれました。全日本コンクールに初出場した時も、金賞を獲得した時も、同声合唱部門で二位をいただいた時も全て三善作品でした。私たちも必死で練習しましたし、たくさんの指導者の方のご縁とお力添えもいただきました。このような賞をいただけたのは三善作品が持っている力であると考えています。歌う人、聴く人すべてに力と愛をもたらしてくれる三善作品です。本日は団員、私、そして一番頼れるピアニスト平林先生と共に三善作品を歌います。どうぞお聴きください。

古「希」とは、これからの人生を、元気に「希」望をもって生きることであると私は考えています。素晴らしい音楽にまだまだ出会いたいものです。

【女声合唱団フィオーリ音楽監督 石橋 久和】

本日は、女声合唱団フィオーリ定期演奏会 石橋久和先生古稀記念 三善3作品を振る!! にお越しいただき、誠にありがとうございます。

初代指揮者 故渡部智先生からのバトンを受け取り、わたしたちと一緒に走り続けてくださっている石橋先生の古稀を、支援して下さるご来場のみなさま、ご指導して下さる先生方、そして大切な仲間たちと共に大好きな合唱曲でお祝いできることに喜びを感じています。

存続危機の時代を先生の忍耐で乗り切り、37年間変わらない音楽への熱い思いを貫き、大きな優しさで今日まで導いてくださりました。先生と共にフィオーリを築き歌い続けてこられたことに深く感謝しています。今後ともフィオーリを更に鍛えてください。

先生、これからもいっしょに歌ってくださいね。次の記念演奏会も楽しみにしています。

終わりに、いつも支援して下さるみなさまに心より感謝申し上げますと共に、今後も変わらぬご指導ご鞭撻をお願い致しまして、ご挨拶とさせていただきます。

【女声合唱団フィオーリ 一同】

プログラム



女声合唱曲集 街路灯

マルメロ
雲
おんな
オルゴール
街路灯

作詩：北岡 淳子
作曲：三善 晃

指揮：石橋 久和
ピアノ：平林 知子

女声合唱とピアノのための 五つの唄

I. 曼珠沙華^{ひがんぼら}
II. あひびき
III. にくしみ
IV. あかんぼ
V. 紺屋のおろく
♪ 爪紅^{つまぐれ}

作詩：北原 白秋
作曲：三善 晃

指揮：石橋 久和
ピアノ：平林 知子



休憩

女声合唱・チェロ・ピアノのための 麦

1. 麦
2. 月明
3. 自転車にのるクラリモンド
4. 悪意－異教徒の祈りから－
5. 水よ

作詩：石原 吉郎
作曲：信長 貴富

指揮：雨森 文也
ピアノ：平林 知子
チェロ：佐藤 翔

童声合唱とピアノのための 唱歌の四季 II

春	朧月夜
初夏	茶摘
夏	海、うみ、われは海の子
秋	赤とんぼ、紅葉、虫のこえ
冬	たき火、おしくらまんじゅう、大きむ小さむ、上見れば虫コ、雪、冬景色、ペチカ
そして春	春の小川、春がきた、さくら

編曲：三善 晃

指揮：石橋 久和
ピアノ：平林 知子

【女声版委嘱初演】

女声合唱曲 こころよ うたえ

作詩：一倉 宏
作曲：信長 貴富

指揮：石橋 久和

女声合唱曲集 街路灯



作詩：北岡 淳子

作曲：三善 晃

初演：女声合唱団渚(1982年)

三善晃(1933—2013年)の作品に触れる前に、知らずして通り過ぎることはできない彼の思いを、遺された著書、インタビュー記事を引用しながら、作品紹介したい。

三善の多くの合唱組曲は、諧調やテンポの緩急で変化をつけて、起承転結の展開があることが多いが、「街路灯」はほぼすべての曲が長調、3拍子(あるいは6拍子、9拍子、12拍子という3の倍数の拍子)を基調として、全体に緩やかなテンポで構成されている。宗教音楽を基礎とする近世西洋音楽では、この3という拍数は神聖な意味合いがある(三位一体[神、イエス・キリスト、精霊]を表す)。そこから類推して、大半が3(の倍数)の拍子で作られたこの作品から、三善の女性(女声)へのオマージュ(憧憬、称賛の念)、賛美の祈りをくみ取ることができるといえよう。音型もゆったりとした3連符のピアノから始まり、次第に6連符の性急な盛り上がりを経て、また穏やかな3拍子(あるいは6拍子や全音符)へと戻って終わる形式になっている。

各曲のタイトルには通し番号がなく、「合唱曲集」と銘打ってあるとおおり、ひとつひとつが独立した歌曲のようにもみえるが、置かれた順で聴いていくと、三善の創作の過程をたどることができるような思いがする。

マルメロ



白いマルメロの蕾が開いたとき、そこにはかすかに滲んだような「血」の色がある—そこに三善は詩人の心の傷(子どもたちの声でしのばれる幼き日の思い出か)、苦悩を見出し、三善自身の創作、生き方と重なって、作曲の発端となったと思われる。「自分が生きていることによって、このような音と出会い、永遠の時間の中の一部を、“創る”という意味で切り取ってくる。創るという言葉には傷つくという意味があります。“時”は、創る人間の傷という意味をになって“持続”になります。そうして初めて、血のかよった、五分間のメッセージができる。それを人様にお渡しするだけです。」(NHKインタビューより*1)

雲



雲の切れ間に見える青い空に、詩人は記憶の海を想起する。その海に幼年期に経験した喪失が沈んでいき、やがてそれは再び詩作となって浮かんでくると思われる。記憶の海に漂いながら創作をするのは、詩人にとっては孤独な、遊びにも似た作業だったのかもしれない。その過程が、自分の幼年期の罪を意識した三善には、同じ創作者としての深い共感があったのではないだろうか。

おんな



女性に月のイメージを重ねた詩。三善もそれに寄り添って、ピアノの間奏部分にドビュッシーの「月の光」を思わせる、きらめくようなフレーズを挿入させている。重さにたおれそうになっても、なお受け容れようとする深い慈愛を讃えた女性へのオマージュと祈りで、しなやかに美しく音楽は満ち溢れている。

オルゴール



詩人の傷が徐々に具体的になってくる。ふたたびめぐりあえなくなった日をおもう木目のはこ(棺を連想させる)。もしかしたら、よみがえってくれるのではないかというはかない望みをもちながら、はこを開けば、そこにみちていたのはレクイエムだった。いつまでも死を悔やむ生者の中で死者は生きている。それは戦争をとおして多くの死に遭遇した三善の心の痛みであり、それと知らずに通り過ぎてしまった若き自分への悔恨、自責の思いでもある。

街路灯



長い絶望の夜の中で、ぼつんと頂に光をともし街路灯に、詩人は自己を投影する。苦しみの果てに、詩人は何かを見出したのであろうか。音楽は最後に、変ホ長調(b3つ)から半音階上がったホ長調(＃4つ)へと一段明るい響きに移行し、一条の希望を予感させて静かに終わる。

ここに三善の言葉を引用しておく。

「一個の生命は全地球より重い」ことをさとっていたはずの人間が、地球上のどこでも、懸命に、(戦争で—著者補足)人殺しをしていた。人間は「考える」けれど、「蘆」のように弱いのですね。(中略)人間は結局は蘆でしかない、という深い絶望と、だからこそ愛し合って生きてゆかねばならない、ということです。(中略)

真の生き方が、報いられることのないもの(深い絶望)に根差していなければならないこと、しかもなお、そこからあなたの生が芽生えてくるのなら、それはまさしく人間愛という形をしている、ということが示されているのです。*2

【参考引用文献】

*1「三善 晃 音楽はメッセージ」人あり言葉あり—NHK訪問インタビュー 日本放送出版協会 1985年

*2「ぼく」であるきみたちに 三善晃「遠方より無へ」 白水社 2002年

作詩：北原 白秋

作曲：三善 晃

委嘱初演：女声合唱団「彩の会」(1983年)

女声合唱とピアノのための 五つの唄

「五つの唄」の曲紹介をするにあたり、私が以前から漠然と疑問を抱いていたこの曲の成り立ちについて、今は遺された彼の著作から推察していくしかない。その手掛かりとなるのが、楽譜にある彼の前書きであろう。一部を引用する。

「(略)それは、私の幼少時から今までの幾つかの季節の色をキャンパスとして、白秋と出遇った自画像を描くことだったと言ってもよい。しかし、書き出す前の、書いている間の、なんどかのためらいは、この仕事は「回想」の性質を帯びることへの怖れからだったろうか。今の私が、十代の私を懐かしむことの罪を、私の書いた音たちは凝視めている。」

委嘱にあたってテキストに選ばれたものが、三善の思い出に重なる、白秋の第二詩集「思ひ出」からの詩。「思ひ出」は、白秋の幼少時代へのノスタルジーを色彩豊かな官能的、開放的表現で綴られている。その巻頭にある序文「わが生ひ立ち」は、詩の解釈の助けとなる、いわゆる「繊細な少年あるある」エピソードの自叙伝だ。恐怖や不安、悲しみ、残酷性、憎悪、性への目覚めといった少年白秋が抱いた、奥深く隠れている秘密の感情。白秋が後年、童謡を書くようになって気づいた「私の本質」。しかし、三善としては、通常の幼少期の思い出よりもさらに深く重い記憶と重ね合わせていたように私は思う。三善の著書によれば、彼は少年時代に体験した非日常の戦争による人の死を子どもゆえに日常と感じて育ち、のちに事の本質に気づいたのは作曲家として戦争にまつわる悲劇を綴った文学、手記に触れてからだという。その悔いを自分の罪として抱えていた三善は、「五つの唄」の作曲にあたって、自分自身を見つめなおし、贖罪の意をもって創作したのではないかと私は考える。

「(三善の前書きの続き)6月12日、栗山さんと彩の会がこれを見事に初演して下さったとき、私はその罪を諾った。そうして初めて母なる彼岸を垣間見た。」

I 曼珠沙華

お墓の周りに咲く曼珠沙華。少女は毎日花摘みに来る。いくら摘んでも次々と曼珠沙華の花は開いていく。あとからあとから死んでいく人のお墓に間に合うほど咲く花に、Gonshan (良家の娘、この地方の方言。異国趣味の白秋がローマ字綴りで記載している)は幼な心にでも泣いていたのかもしれない。或いはこれから来る死の予感に恐れていたのだろうか。

戦争で逝った人々への哀悼と、その悲劇に無感覚だった幼い自分の罪を見つめながら、三善は作曲していたのだろうか。遠くでピアノが吊いの梵鐘のように鳴っている。

II あひびき

昼日中に人目をしのいで、おどおどと密会した男を家に帰す女。その様子を物陰から見る少年。少年は、大人の「秘密」をここにひとつ発見した。白秋は「きつねのろうそく見つけた」と表現している。流麗なピアノがびたと鳴りやんで、アカペラの合唱がモノログのように歌う時、子どもがふいに秘密を知った驚きと恐怖を、音楽は迫真性をもって聴く者に訴える。

III にくしみ

捕まえてきた綺麗な蝶を、幼子が受け取らないのに立腹して、その子の唇に蝶をすりつけるという詩で、少年の残酷さを描いているとは白秋についての解釈。私は三善晃のある随筆*3に、この詩の情景と重なるような一節を読んだ。中学二年の初夏に、三善少年は「もしかして」死ぬかもしれないという恐ろしい不安から、寝たきりの祖母の顔に桶を被せようとしたという生々しい描写がある。「押ししておくれ、あきらさん……」という祖母のつぶやきで我に返ったものの、三善にとって忘れ得ぬ罪の意識として残ったと思われる。これが、この詩とどこまで重なるかは各人の想像に任されるし、三善晃もそう答えるだろう。不安と絶望が入り混じったような音楽が綿々と展開していく。

IV あかんぼ

白秋は弟、妹が多かったため、乳母に育てられている。新たに生まれた弟妹に親の愛が向くことへの妬み。そのあかんぼを狙う黒猫にはっと気づいて、怖れる繊細な少年の心。ピアノは、憎しみで渦巻く心象を描いた速い3連符と、猫の忍び寄る足音を軽快な3連符で描写している。

V 紺屋のおろく

最終曲は、俗謡調の開放的な音楽で終わる。音楽は軽快だが、詩は「瀉に陥って死ねばよい」と露骨な表現である。誰もが心の闇で浮かびそうな思い。だが三善はそれを当たり前とせず、自分の弱さと認めて、その絶望から創作に向き合っていたように思われる。

爪紅

五つの唄の初演時にアンコール曲として作られた小曲。白秋の郷里、柳河は堀河の美しい水郷である。曲は舟歌を思わせる、ピアノの左手のゆったりした流れと、右手と合唱の美しい旋律が交差する。爪紅とは鳳仙花の異名。この花の汁で爪先を染める化粧として古くからあり、明治期には子どもの遊びにもなっていたのであろう。爪先にまで思いを滲ませる、繊細な白秋ならではの詩。

【参考引用文献】

*3 幼時からの点線 三善晃「遠方より無へ」白水社 2002年

女声合唱・チェロ・ピアノのための

麦

作詩：石原 吉郎

作曲：信長 貴富

委嘱初演：カンテイ・サクレ/うた・ふぐるま
(2016年)

詩人 石原吉郎の作品を読むということは、彼の苛酷なシベリア抑留を体験して戦争を考え、平和を願うという狭義の意味ではない。強制収容所での想像を絶する極限状態で、生から死まで人間のすべての苛酷な局面に対峙させられ、なおかつ日本人の戦争責任を背負ったと自負して帰国した故国でも、新たな理不尽ともいえる差別、障害に遭遇した石原は、自分の経験を饒舌に語ることにむなしさに気づく。そして、むしろ告発しない(石原は「沈黙」と表現した。暗喩などを用いてあからさまには表現しない)ことによって、人間の原点を問い直したいという思いが、彼を詩作へと駆り立てたと思われる。よって彼の詩には、収容所での直接的な描写、感情移入の表現はみられず、自由な暗喩を駆使し、のびやかでリズムカルな詩句が連なっている。それが、かえって読み手の自由な想像力をかきたて、石原が伝えたかったシベリアでの悲劇、人間の在り方を深く考えさせる境地へと向かわせている。

作曲者の意図としては、楽譜まえがきによれば、「石原の選り抜かれた言葉の中に芸術的普遍性を見出すこと(中略)。極限状態を経験した人間だからこそ到達できる言語的境地があることを、石原の詩句は示している。」

石原吉郎に深い理解を寄せて作られた合唱曲『麦』は、妥協のない音楽の追求を通して、私たちを人間のさらなる深淵に誘う作品になっている。

1 麦

作品全体としての題でもある『麦』。

詩人は物言わぬ、ただ風に耐えて真っすぐ立ち続ける“麦”に自身の姿を見た。饒舌では伝えられなかった思いを、「沈黙」という詩作の手段で表現しようとしている。“麦”がつかえたまま引きとめている無数の矢は、詩人が世に向けて放ちたい抑留体験での苦しみ、不条理への怒り、ひいては人間が生きていくために抱えざるを得ない葛藤や苦悩、罪の告発である。

「日本人」「シベリア抑留者」「石原家の一員」という、集団的な範疇(位置)で規定される前に、一人の自立した人間として“炎”“勇氣”“決意”、そして“祈り”をもって、麦のように物言わず立ち続けたいという願いが込められている。

2 月明

刑期25年という信じがたい判決を受け、苛酷な飢えと寒さの環境で強制労働を強いられた石原は、この頃の感情を、怒りや絶望さえ通り越して、言葉そのものが虚しくなってしまう「寂寥」であったと述べている。彼は囚人として均一化するよう強制された集団の中で、感情とともに言葉を失くしていく。“悲しいかな”という簡潔な言葉の奥には、底知れない、言葉では表現しきれない情念が込められている。

3 自転車にのるクラリモンド

“クラリモンド”は石原がドイツの作家ハンス・エーヴェルスの小説に出てくる妖精の名前と説明しているが、詩はその小説の内容とは関係なく、“クラリモンド”という言葉の響きやリズムに引かれて着想したと思われる。ここには、石原の詩につきまとう暗い影や隠喩はなく、伸びやかに明るく軽やかな世界が表現されている。ただそこは、(現実的に)目をつぶることによってのみ見える幸福という、非現実の世界なのだ。

4 悪意—異教徒の祈りから—

“ふたつの悪意を向きあわせてしましましょう”という、このふたつの悪意とは、石原の言葉から推測して、「加害者」と「被害者」という、相対する関係であると考えられる。

まずは旧約聖書のヨブ記を思い起こさせる、人間の信仰を試すために苦難を与える神の悪意(加害者)と、その受難を呪う人間(聖書ではヨブ)の悪意(被害者)。なぜ神は不条理に苦しむ信者を救済されないのか。そこには日本人としてのキリスト教信仰の模索もあったと思われる。

そして、収容所の囚人同士での生き残りをかけた生活(労働、配給食、そして密告—不審な行動を監視に告発して厳しい労役から逃れる)の中での冷徹な争い。囚人の間でも、体力や欲に勝るものが「加害者」となって生き残り、弱い慎ましかな者が「被害者」となって淘汰されていく世界。この時に、石原は「加害者」の立場で生き抜こうとする欲望に打ち勝って、あえて「被害者」の側に自ら立ち続けて沈黙を守った(密告しなかった)同胞、鹿野武一氏の生き方に深く感銘し、その後の石原の生き方の指針にしている(エッセイ「ベシミストの勇氣について」より)。これは自己犠牲という美談ではなく、石原は自己に「加害者」を認識した鹿野のような者が、人間として単独に明確な位置で自立しようと考えたのである。

5 水よ

石原がキリスト教信者であったことを鑑みると、“風”は「創造者の神がアダムに吹き込んだ霊的な息(風)」の比喻と解釈できると、複数の研究者が指摘している。その見地から読めば、この詩は石原の神への讃美と私は捉える。“風”によって波立つことで輪郭を得た“水”に、帰国して再び自己を取り戻した自分を投影している。“水”が“ながれ行くかた”は、故国であると同時に、人間の原点・自由を見つめた「最もよき私自身」が残るシベリアの収容所(詩集「サンチョ・パンサの帰郷」のあとがきより)でもあったのだ。ただ不幸な人生を呪うのではなく、人間の在り方を深く考え、神への信仰を貫いたと知れば、石原だけでなく、私たちまでもが救われた思いがするのではないだろうか。

古稀に寄せて



1994年11月、金沢市で行われた全日本合唱コンクール全国大会・一般の部Aグループの最後に演奏したのが女声合唱団フィオーリでした。三善晃先生の「三つの夜想」を艶やかな声とダイナミックな音楽で感動的な演奏をなさり、見事金賞。これが、私とフィオーリとの出会いでした。

石橋先生42歳、私は34歳。それから28年。石橋先生の古稀をお祝いする演奏会にご一緒させていただけることは感無量です。石橋先生とフィオーリはその音楽活動の中で積極的に三善作品を取り上げてこられました。三善作品が世界に誇る日本の文化遺産であり、ドイツ人にとってのバッハやベートーベンに匹敵する音楽であることは論を俟ちません。ですから、古稀という人生の大きな節目で、石橋先生が三善作品を並べて演奏なさることは本当に意味のあることだと思います。また、2019年にフィオーリが初めて委嘱初演をした「そうそうと花は燃えよ」の作曲者信長貴富先生が本日の演奏会の為に「ころよ うたえ」の女声版を書いてくださったことも、記念演奏会に大きな花を添えることになりました。ちなみに、信長先生は三善晃先生に憧れて作曲家を志されたと同様です。三善先生—信長先生—石橋先生は、音楽という太い絆で繋がっておられるとも言えます。どんな熱い演奏会になるのか、ワクワクが止まりません。

フィオーリ音楽アドバイザー・雨森文也



石橋先生、古稀を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

実は、先生と初めてお目にかかったのはもう随分前で、東京で活動する混声合唱団CANTUS ANIMAEの練習見学に来られた時の、にこやかなご挨拶や熱心なご様子が記憶に残っております。

2019年の夏、先生の本拠地出雲で濃密な音楽の時間をご一緒して以来、そのおおらかさに導かれたフィオーリのしなやかな歌声の響く時間は、すっかり私の音楽活動の中核となっています。

時々「この指揮はどう振ればいいでしょうか。」と、小声で縋るように雨森先生に眼差しを向けられたり、練習の合間に「平林先生、どうですか。」と意見を求めてこられるなど、決して上から目線で物を仰る事はなく、正直で誠実な姿勢は可愛らしくて(年下の私が申し上げる失礼をお許してください)、皆さんから慕われるのも当然だと思って拝見しております。大きな信頼を下さっている幸せにただ甘んじずに、その思いに応えるものを提供できるように勉強を続けなければ、と思いを新たにしております。

どうか一日も長くお元気で過ごされますよう、そして、これからも濃密で素敵な音楽の時間を共に過ごす事ができますように。

ピアノ 平林知子

童声合唱とピアノのための 唱歌の四季 II

編曲：三善 晃

一部初演：東京放送児童合唱団(2002年)

全曲初演：NHK東京児童合唱団(2003年)

「唱歌の四季II(以下、「II」と略)」は東京放送児童合唱団(現：NHK東京児童合唱団、以下「N児」と略)の委嘱で作曲、初演された。明治以来、音楽の教科書にとりあげられていた多くの唱歌が、時代の変遷とともに、新しいポップスやアニメソングに置き換わって消えていくことを惜しんだN児指揮者の古橋富士雄氏の提案により、合唱曲として今を生きる子どもたちにも歌い継いでもらいたいという願いをこめて、「唱歌の四季(以下、「I」と略)」が作曲され、その流れで続編IIも作曲された。

I が4曲(+アンコール用に加えられた夕焼小焼)で3~4声部の構成であるのに対し、IIは大人数になった合唱団のために、年齢層で3つのグループ(小学校1年~4年 Juniors、5~6年 Middles、中学生~高校生 Seniors)に分けて、多重性・立体性をもたせた構成になっている。各パートがそれぞれの声の色彩を生かして、美しいポリフォニーを協演しているようである。また、I は各曲がそれぞれいったん終止しているのに対し、IIは曲数が多く、音楽が途切れることなく、次の曲へとつながっていくメドレー構成になっている。命の連続性、時間の連続性を意識した三善の作曲意図を感じる。

三善は、多忙な作曲活動とともに、桐朋学園大学の学長として20年にわたり教育現場で学生の指導をし、さらにはピアノ教則本を執筆して、音楽教育活動にも熱心に取り組んだ。たとえば三善メソードのひとつとして、和声の成り立ちを、単音奏(一音の演奏)→重音奏→和音奏の発展で、やさしい音符で子どもに学ばせていく工夫をしている。IIの中でも、終曲「そして春」の始まりの「春の小川」はJuniorsの単旋律から始まって、次第にMiddles、Seniorsが加わっていくことにより、和音が作られ、さらに対位法も駆使し、音楽の構成が自然と身につくような、三善の優しい手引きを感じとることができる。

三善はフランス留学から日本に戻って、改めて、日本人としての自分を自覚したと思われる。美しい自然、四季を歌った唱歌や童謡に、次の世代へのつなぎ手の役割をゆだねて、三善は筆を進めていたことであろう。



【女声版委嘱初演】

女声合唱曲

ころよ うたえ

作詩：一倉 宏

作曲：信長 貴富

委嘱初演：女声合唱団フィオーリ(2022年)

石橋久和先生の古稀の記念の年に、こうしてまたご一緒できる機会をいただけて嬉しいです。何かお祝いの気持ちを表したいと思い、手前味噌かつ押し売りのようで恐縮しつつですが、「ころよ うたえ」の女声版編曲を捧げることになりました。この曲は2011年に混声合唱曲として作曲し、福島県の高校生たちによって初演されたもので、以来全国の合唱団に愛唱していただけてきました。2013年には男声版も登場しています。長らく女声版だけが存在しなかったのですが、いよいよ今日、誕生します。

石橋先生の古稀のお祝いに、という動機は、まさにその通りなのですが、きっかけとしては実はもう少し遡ります。何年前かはっきり覚えていないのですが、確かフィオーリとご一緒した最初の年の、何かの宴席のあと、どこかのお店を出た夜空の下で、団員Hさん（現団長）が、「ころよ うたえ」歌いたいです、女声版作ってください、のような意味のことを私に仰ってくださいだったのでした。もしかして酔った勢い発言でご本人も覚えていらっやらないのではと思ったのですが、今回確認しましたら覚えていらっやるとのことでした。というより、その発言を私が覚えていたことに驚かれていらっやいました。ともかく、そのHさんの言葉が心にひっかかっており、そのことと石橋先生のお祝いが重なって、めでたく「ころよ うたえ」女声版編曲ができあがったというわけです。ご縁に感謝です。石橋先生、おめでとうございます！

信長貴富

女声合唱団フィオーリ

CORO FEMMINILE FIORI

【音楽監督】石橋 久和 【音楽アドバイザー】雨森 文也 【ピアノ】平林 知子・橋本 裕美子

♪ SOPRANO

青山 奈未 今岡 かおる
江田 英倫子 土江 いづみ
長岡 実里 錦織 美香
平野 愛子 宮本 美樹
森田 恵子

♪ MEZZO

青木 朋子 五百川 紘世
伊藤 志保 稲田 節子
今宮 深雪 高橋 美瑚
長廻 彩夏

♪ ALTO

伊藤 麻梨子 井上 菜々花
菊田 緑里 田中 彩子
本田 千恵 村上 滝子
渡部 歌織

(唱歌の四季Ⅱ 賛助出演) 大国 聖子・白枝 多美子・直良 友夏・三神 田鶴子

(本演奏会休団) 伊原 加笑・大田 愛子・武井 日奈子・引野 淳子・別所 絵梨奈

【沿革】

1985年出雲市立斐川西中学校合唱部OGを中心に、故渡部智先生を指揮者に「フィオーリ・ムジーク」を結成。1986年4月から石橋先生を迎え、1987年から全日本合唱コンクール島根県大会に出場。翌年初めて県大会金賞、1992年同大会の全国大会出場を機に「フィオーリ」に改名。2020年で結成35周年を迎えた。

毎週1、2回の練習、夏の定期演奏会、島根県合唱祭、地域文化活動への参加や全日本合唱コンクールへの参加(全国大会出場19回/金賞2回)などを活動の中心とする。

2019年、第30回の定期演奏会を記念して信長貴富氏に初委嘱し、生きる理由を問い続ける決意を込めた『そうそうと花は燃えよ』を初演。合唱を楽しみ、その素晴らしさを伝えられるよう、出雲を中心に歌い続けている。



あとがき

今回の曲紹介は、三善晃の言葉を借りれば「だんだん言葉の説明が多くなっているように思う」。しかし、「手掛かりってというのがあったほうがいいのか、と。」(対話集「波のあわいに」から)。昭和が遠くに感じられる世代となった私たちには、この時代の芸術家の源流を知らずして、彼らから深い共鳴を得るのは困難になってきているように感じます。このたび、三善晃や石原吉郎、信長貴富の航跡をたどることにより見いだせた私たちの感動を、この演奏会をおして皆さまと共有できれば、これに勝る喜びはありません。

最後にもうひとつ、三善晃の言葉を紹介して、あとがきといたします。
「詩が「贈らない」答えは、詩を読む人の数だけあるかもしれない。(中略)ただ確かなことは、一人ひとりが、自分はどうのように生きるのかを日々自らに問いかけることによって自分の答えを、あるいは答えが無いことを、確かめてゆくよりほかないということだろう。」*4

プログラム解説・文責 今岡 かおる
編集 伊藤 麻梨子

CORO FEMMINILE FIORI

